生きづらい子に居場所を

支援団体代表らシンポ 高知市



支援団体が活動を紹介したシンポジウム
（高知市はりまや町１丁目）

生きづらさを抱える子どもの支援について考えるシンポジウムがこのほど、高知市内で開かれた。居場所づくりなどに取り組む支援団体の代表者ら7人が、子どもの現状や必要な支援などについて意見を交わした。

不登校の児童や生徒を支援する団体の井上紗織さんは、不登校が近年、低年齢化していると指摘。学び直せる環境や経済的に厳しいひとり親世帯への支援の重要性を挙げ、「困った時や迷った時に、いつでも立ち寄れる場所が大切」と訴えた。

居場所づくりに取り組むサークルの代表、木村美友さん(20)＝高知県立大2年＝は、街を歩き、公園などにいる子どもたちに声をかける活動を続けている。「存在を知ってもらわないと（支援が必要な人と）つながれない。家族や友人らに伝えて」と呼びかけた。

予期しない妊娠やDV（ドメスティックバイオレンス）被害に悩む子どもに支援が行き届いていない現状には、登壇者から「この人なら安心して話せるという関係をつくることが大事」「トイレに相談シールを貼って周知したい」などの意見が出た。

不登校支援に携わる高知市内の50代女性は「子どもを多方面からサポートするための引き出しにしたい」と話していた。

8日のシンポは高知東ロータリークラブが主催。ロータリーや支援団体の関係者ら約50人がメモを取りながら耳を傾けた。（横田晃大）

2026年11月11日高知新聞掲載記事